

私が出会った素敵なお母さんたち

相山女学園大学教育学部
松村 齋

素晴らしいお母さんたち

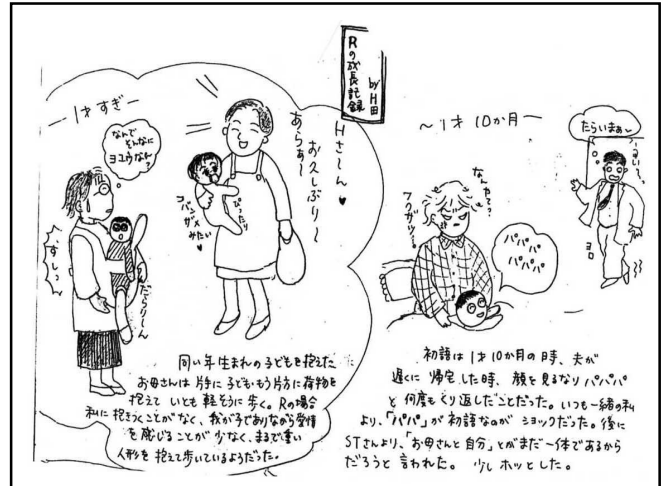
- 私は、多くの子どもや保護者の皆さんから学ばせていただき、今に至っています。
- 子どもたちからたくさん励まされ、時には未熟な私の実践にご指摘を頂き、また、時には寛容な心で受け止めて頂きました。
- また、お母さん方をはじめ、多くの保護者の皆さんに支えられ、幾多の場面を通じて、「人を育てる」ことの意味を教えてくださいました。

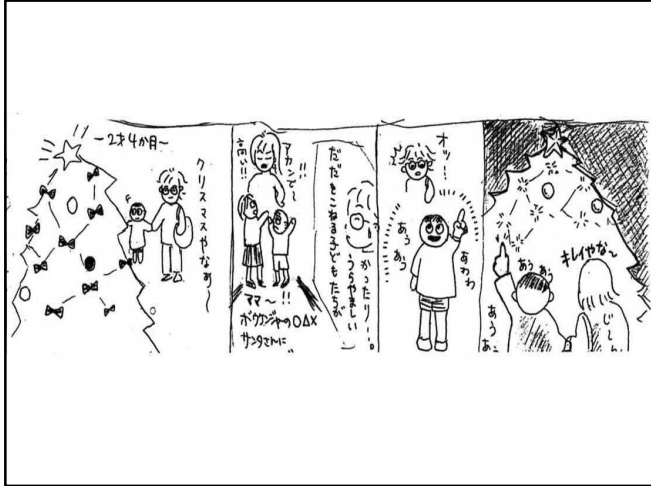
子どもたちからたくさん学んだ

- ダウン症のAちゃんは、1年生。
- 比叡山の頂上を教師と一緒に歩きます。
- 一合目から、一步一步、列の最後を歩きます。

小学部 歩け歩け 比叡山登山

保護者の思い





演習1

- 先生方は「自閉症の子ども」をもつ保護者。
- あるサークルの集会の時間で・・・。
- お部屋に入り、自分の座席に座りましょう。
- ほかの皆さんは、静かに集合をはじめる・・・
- お部屋をウロウロ・・・(お部屋を飛び出し・・・)
- 何度も、何度も・・・呼び戻し・・・
- 「いい加減にしなさい」、じゃ～～～(おっっこ)
-

視点の返還

- だめでしょ！！こんなところで、おっっこ、しちゃ！！(怒)
- 困った子だな。(怒)
- もしかして、おっっこがしたかった？
- なぜ、「失敗」したのだろう・・・。
- 伝えようとしたけど、伝わらなかったんだ。
- じゃ、どうすれば伝わるようになるの？
- 伝わるための工夫を考える？試してみよう。

演習2

- 皆さんは、まだ生まれたばかりの「赤ちゃん」をもつ、お母さん、お父さん。
- 急に「赤ちゃん」が泣き出しました。
- 一生懸命、あやしますが・・・
- 周囲の目も気になります。
- どうも、泣き止まない
- さて、どうしますか？

子どもの行動には原因がある

様子	原因・課題	目標	手立て・配慮	評価
子どもが大泣きする	お腹が減った		ミルク(母乳)を与える	
	気持ち悪い		おむつを取り替える	
	異物が痛い かゆい		衣服の中の混入物を探す	
	寂しい		愛情たっぷりの「だっこ」	
	人みしり (環境)		第2者との形成をベースに外界へ	

冰山モデル





「困った子」は「困っている子」

- お部屋にいる自閉症児をとらえる「視点」として「困った子」は「困っている子」というとらえ方、考え方が、かなり広まってきている。
- 「困った子」というのは、先生からみて指導が難しいから、「困った子」。
- それに対して、「困っている子」というのは、この子の立場になって考えると、多くは、先生に叱られたくてやっているわけではない。

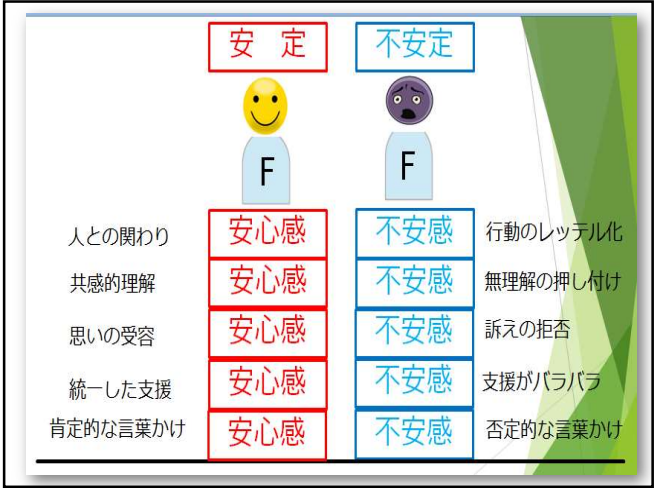
- 逆に、ほめられたい気持ちはあるのに、叱られる行動をして、本人自身が困っている。
- つまり、その当事者の視点にたった理解をすることが求められる。
- 何に困っているかをつかむことが、実は遠回りのように見えて、支援の近道になるのではないかという考え方です。

引用文献 別府哲 高機能自閉症「子ども・青年の発達と生活(クリエインかもがわ)

第2者の存在の大きさ

愛される重要性(愛着形成)

- 「求めたら」⇔「応じてもらえる」
- 無条件で愛される経験の大切さ
- 安心感の積み上げ
- 子どもの側に「母親(父親)」そして「人」を受け入れる「素地」を作り上げる。
- その素地が、人と人の「関係性」をさらに作り上げ、「コミュニケーション」へと発展していく。
- そして、「社会性」へと成長していく。



自信の「ある子」「ない子」

自信がある子

- 積み木の塔を最後までじっくり作りきる。
- 絵本をじっくりと見て、大人が発見できない細かな内容を読み取ることができる。
- 友だちや先生のお話をじっくり聞いて、ゆきかわせることができる。
- 相手に物をかすことができる。
- 先生を基地に集団の中にいる。

※このような状態が「落ち着いている」ということ

自信がない子

- 積み木の塔を最後まで作れない・・・
- 絵本のぺらぺらとめくっている・・・
- 友だちや先生とも、自分の要求のみを伝えている・・・
- 物欲が強い・・・
- 先生を自分だけに振り向けさせようとする・・・

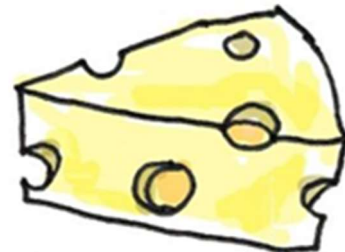
「出来た」「嬉しい」
「また、やりたい」と
心の底から実感できる
(2F)

愛されている自分
(1F)

自転車乗れたよ！！



自信のない心の状態



読み障害を告白した教師

- Kさん。
- 学習障害を公表した教師。
- 文字を読むのが苦手だった。
- 紙に書かれた文字を見た時、白と黒のどちらに注目したらいいか混乱する。
- 白いキャンパスの上に黒ごまや黒大豆がばらまかれているように見えてしまう。
- ○○市○○学校教諭、
Kさんは・・・

学習障害(LD)の一種、 ディスレクシア(読み障害)だ。

- 小学2年の道徳の授業が鮮明によみがえる。
- 配られた読み物を各自で黙読する時間。左手の人さし指で文字を一つずつ指しながら、一向に頭に入ってこない文章を必死に読もうとしていた。
- 「まだこんな所」。教師のひとつで、周囲の友達視線が一斉に注がれた。
- 「何やとったんや、1時間」「おれなんか、2回目やぞ」。

- 気がつくと大粒の涙がこぼれ、「もう本なんか読まないぞ」と心に決めた。
- 読みやすいよう、赤ペンで単語ごとに斜線を入れる分ち書きをしたら、「教科書を粗末にするな」と怒られた。
- 3時間練習してから授業に臨んでも、つまりながらしか読めず、「努力が足りん」と頭にチョークで×印を書かれたことも。
- 「自分はばかだと劣等感ばかりが募っていった」

さらに・・・

- 教師や友人からもぞんざいな扱いを受け、「自分は生きてはいけない人間なのではないか」と思うようになった。
- 自殺まで考えたあげく、ついに感情が爆発して教師に手を上げた。荒れた学校生活の始まりだった。

この選択が運命を大きく変えた。

- 自衛隊に入隊したのは、自分のことをだれも知らない土地でやり直したいと思ったからだ。
- 「秘密保持のために文書を最小限しか残さない自衛隊では、口述による伝達と、実物操作による教育が中心。自分にぴたりと合った。
- 同期よりも早く、正確に多くのことを習得し、自信を取り戻せた。
- 新隊員の教育係も任され、意外と教えることに向いていると思った」

上官に頼み込んで・・・

- 教員免許取得のために夜間の短大に通い始めた。
- 講義はカセットに録音して聞き、板書はカメラで写して読み返した。
- 厳しい訓練をしながら、レポートを提出するのはつらかったが、「自分のように勉強が苦手な子の気持ちが分かる教師になり、自分が体験したつらい思いをさせない教育を」という思いがぶれることはなかった。

教員採用試験には3度目の正直で パスした。

- 23歳。中学で不登校や非行の生徒と向き合い、特殊学級も受け持った。
- 教壇に立ってしばらくたったころ、テレビ番組を見て、自分がディスレクシア(読み障害)だと知った。
- 「ショックだった。でも、自分の努力不足でなかったと分かり、頭の中のもやが晴れた気がした」

- 5年前、障害のことを告白した。特殊教育の研修の場で、全国から集まった志の高い仲間と接し、自然と心が動いた。
- 「ばれないようにと、いつも細心の注意を払って過ごしてきたが、肩の力が抜け、自分らしく自然体で生きられるようになった」
- 「一人ひとりの子に合った支援をしていく特別支援教育が広がれば、発達障害の子やそうでない子にとっても、分かりやすい授業が実現し、学校が心地よい居場所になる」と思う。教育する側に立ち、自分は使命を持って生まれてきたと思うことがよくあるという。

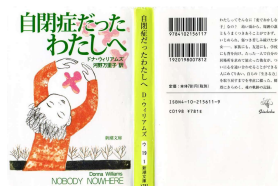
Kさん

- ○○市出身。高校卒業後、陸上自衛隊に勤務しながら、中学校技術科の教員免許を取得した。
- 現在、講演その他、全国的に活躍中。

『自閉症だった わたしへ』

ドナ・ウィリアムズ 著

- 1963年 オーストラリア
- 1992年 著書発表
- 世界で初めて自閉症者の精神世界を内側から描いた
- 現在 イギリス
- 07年 来日
- その成長には、母親の献身的な努力があった。



自分の特性とうまく付き合う人たち

- 「僕は、集団に入るのが昔から苦手だったので、必要以外は集団に入らないようにしています」
- 「僕は、蛍光灯や陽の光をみると、どうしても混乱してしまうので、皆さんから見たら、変な感じかもしれませんが、色つきのメガネをしています・・・」

- 「僕は、音を拾いすぎてしまうので、いつもは耳栓をしています。ご用があれば、合図してください。耳栓をとりますので・・・」
- 対人的なかかわりがナチュラルで、相手に理解を促すようなスキルが身についている。

共通していえること

『自閉症だった わたしへ』
ドナ・ウィリアムズには、
共感的理解が得られる家族がいた

①よき理解者がそばにいること。

- 当事者が頑張ったこと、悲しかったことを共感的に理解できる「よき理解者」がそばにいること。
- 「よき理解者」がいるということは、「心地よい環境」が提供されているのと同じこと。
- 「よき理解者」& 「心地よい環境」をベースにしながら、出来ることが増えていく。
- 「褒められる」自信につながり、情緒の安定につながっていく。

②よい体験を積んでいること。

- 他の子どもたちと同じ課題ができなくても、その一年ごとで、本人が達成可能な体験を上手に体験させ、成功を積みさせること。
- 出来たら、本人がどこを頑張ったのかを探り、言葉や態度で褒めてあげること。
- 肯定的な要素を含むコミュニケーションを好み、相手を受け入れやすくなり、つながりやすくなる。

③人を信頼できること。

- 他者視点が持ちにくいと言われる自閉症者にとって・・・
- ある大学の事例・・・
- 「注意される」「叱られる」ことについても、大人との関係の中から当事者なりに理解できる。
- 同じ状況に出会ったときに・・・
- 「駄目なものは駄目」。これが納得できることは、社会での生きづらさの軽減につながる。

④自己肯定感が高まること。

- 他の友だちと比較したら、確かに同じ内容や量はできないけれども、自分の力で精一杯成し遂げた取り組みの積み重ねは意味あること。
- これまでは大好きな友だちや先生、保護者から、褒められる立場から、以後は、自分で自分を褒め、自分を客観視すること。
- 「先生、僕ってすごいでしょ！！」
- 「おれ、ちゃんとやっているでしょ！！」
- 「あの人のようになってみたい！！」

⑤自らの特性と うまく向き合えること。

- 自らの特性とうまく向き合うためには、これまでの、いくつかの条件が必要。
- 大人の都合で、特性の告知は、本人の環境を一変させる可能性が症例では多い。
- 早期発見、早期療育(教育)の大切さと「告知」のタイミングについて。

継続した支援が当事者の (本当の)自立を支える

「5つの視点」

- ①よき理解者がそばにいること。
- ②よい体験を積んでいること。
- ③人を信頼できること。
- ④自己肯定感が高まること。
- ⑤自らの特性とうまく向き合えること。

事例 地域に必要とされた Mさん

「学校、行くのいや！！」

- Mさん(23歳)
- ダウン症
- お母さんはこう振り返る
- 地元の小学校・中学校、(知的支援学級)を経て、地元、養護学校高等部に進学
- 小学校では、毎日、「学校、行くのいや！！」
- 集団登校の場面では
- どうしても、集団のスピードについていけず・・・

- 中学校では、バレー部に入部し、3年間、部活動を頑張り通した。
- 支援学級の担任の先生は、国語の先生、さらに、バレー部の顧問だったこともあり、Mさんは、クラスでも、バレー部でも大切にされ、集団の中で、人間関係を深めて、お互いに育ちを深めていく。

お母さんの凄いところ！！

- 中学校では、職場体験というのがあります。
- Mさんは、地域の老人ホームにいきます。
- 学校も、担任も、老人ホームの仕事が出来るのかと、かなり不安があったそうです・・・
- そして、担任がホームに訪問してみると・・・
- Mさんは、元気に実習をしている・・・
- 爪切り、入浴介助、レクリエーションという取り組みは・・・

- ホームの利用者の皆さんが口々に言うには…
- 「どこそこのMちゃんかあ…」
- 「大きくなったなあ…」
- 「Mちゃん、ここ(傍に)おいで…」
- 元来、模倣の文化が素晴らしくお世話好きのMちゃんの行為は…
- 多くの利用者の「Mちゃん、ありがとう」につながりをみせていく。

- 確かに、Mさんは、本来の実習の内容ではなかったが、それ以上にスタッフでは出来ない、場の雰囲気や和ませたり、利用者の「受け身的」な立場から、「能動的」な立場へと変化するなど、生きる希望へとつながった。
- また、お母さんが、Mさんが小さい頃から、地域との連携を大切にされたことも、我が子の将来を考えたときには、非常に重要であった。
- お母さんは、こう振り返られる…

- 私自身、ダウン症に特別な知識もなければ、当然、経験もない。
- でも、Mが小さい時から、多くの人々に可愛がられ、そして、その都度、多くの人との出会いに感謝してきてただけです。
- 中学校3年生の最後の中体連予選では、ピンチサーバーとして、コートに立つMさん。
- その後、養護学校の高等部を得て、地元の作業所に自分らしく元気に通勤している。

子育てに完璧な人なんていない

- もちろん、子育てに正解や間違いもありません。
- しかし、基本的なコツはあるでしょう。
- 私たちは、それをどこかで学んで、子どもたちに関わっています。
- 「分からない」ことを「分からない」ということの大切さ。
- 今の時代、子育てに「負担感」や「自信のなさ」を感じるの、むしろ「ふつう」です。

上手に褒めること

- 一般的に、罰(ばつ)の効果は一時的です。
- 例え、行動を抑止できても、望ましい行動に結びつくわけではありません。
- それどころか、罰は子どもの恐怖心を利用したコントロール法で、暴力を肯定する態度を、子どもに学習させてしまうことに繋がります。
- 望ましい行動を形成するためには、急がば回れで、やはり褒め上手になること。

自分を大事にできること…

- 自分を大切にしてもらえる経験は、周りの人も大切にできる。
- 自分に優しくしてもらう経験が増えると、自然に周りの人に手が差し伸べることができる。
- 仲間に支えられ、そして仲間を支える。仲間の中の所属感が、自分の存在を高める。
- 子どもは集団から「社会」を学ぶ。仲間の大切さ。

- 自分を大事にしてもらえる経験は、周りの人を大切にできるようになる。
- 自分に優しくしてもらった経験が増えると、自然に周りの人に手が差し伸べることができる。
- 仲間を支えられ、そして仲間を支える。仲間の中の所属感が、自分の存在を高める。
- 仲間に認めてもらうことは、大人からの承認と違う効果がある。子どもは集団から「社会」を学ぶ。仲間が大切。

最後に

子どもの人生に直面する。

「先生、ごめんな！」

- 時に私たちは、子どもの人生に直面する 때가あります…
- 筋ジストロフィーのMくん。
- 小学部から、私のクラスへ
- 「ぼく、先生の子どもになる」
- 毎日の養護・訓練（自立活動）
- 夢の東京ディズニーランド
- ホテルのお風呂で…
- 高等部の体験へ

「先生に出会えてよかった」

- ついつい、私たちは、遠い将来を心配するあまり…。(保護者)「あれしなさい」「これも…」
- 親なき後を考えて、「今何をすべきか」と焦り、「何もかわらない」現実で落胆をします。
- しかし、子どもは「今を生きている」。
- 本人は、さぞ、楽しかったであろう。
- 「この子は、本当に先生に出会えてよかった…」

子どもにとって自立とは何だろう

- 一人ひとりの子どもたちにとって…
- その時期に適切な支援を受けたかどうかは、その後の人生に大きな影響を及ぼします。
- その「適切な支援」と言うのは、集団や他の個人と比較して、表面的に「出来ないこと」を「出来るようにすること」ばかりではない。
- 障害の有無に関係なく、人に大切にされた子どもは、その大切にされたことをもって、内面を豊かに作り上げ、自己で選択し、自分で決定できる、力強さをもつ。

- 時に、私たちは、子どもの将来のことを考えて、自立させなければと焦るが、私たち大人であっても、人と支え合い、補完し合って毎日の生活を送っている。
- 私たちとて、根っこところは、よき理解者が、家庭や職場、さらに社会全体に存在する。
- 全てにおいて、一人で生きていくことはあり得ないので、その子(人)なりのよりよいコミュニケーションが、その時々に応じて築いていけることが大切だと思う。

- そのためには、例え、人と同じことができずとも、自分が大好きな人になること。
- 子どもたちは、毎日、今を生き続けている存在だから、私たちは、焦らず、今、子どもたちが「出来ないこと」「力をつけられないこと」を無責任だとは思わず、内面に丁寧に寄り添いながら、この時期に必要な適切な支援を地道に行っていく事が望まれる。
- 内面に寄り添うことは、実は遠回りのように見えて、子育ての近道になるのではないかと思います。

ご清聴ありがとうございました